

資料紹介

静岡県富士市伝法中桁遺跡出土の平安時代須恵質土鍾について

種 石 悠

I. はじめに

中桁遺跡^{なかつた}は、富士山の裾野南面に広がる広大な扇状地堆積物上に立地する(第1図)。遺跡は、現地形で富士川の東方およそ3kmを流れる潤井川の東岸に所在し、遺跡の南方約5kmには駿河湾が控えている。地籍は、静岡県富士市^{ふじ}字伝法^{でんぽう}1211番地の1外である。

中桁遺跡は、古墳時代後期初頭から平安時代10世紀前半までにわたって集落が営まれた複合遺跡である。本遺跡については、富士市教育委員会から発掘調査報告書が刊行されている(志村2004)。

本稿では、前掲報告書中で「紡錘形管状石鍾」とされた遺物について再度詳細な紹介を行なうとともに、属性について再検討を試みる。筆者の実見の結果、本資料は石を素材とはしておらず、実際は須恵質であることが判明したからであり¹⁾、また報告の分析が不十分と思われたためである。駿河湾沿岸地域では、古代に属する須恵質土鍾の出土は本資料以外認められない。さらに、後述するように、非日常的行為を想起させる本資料の出土状況も注意される。儀礼に関連する遺構からの土鍾の出土は、当地域では管見に触れない。

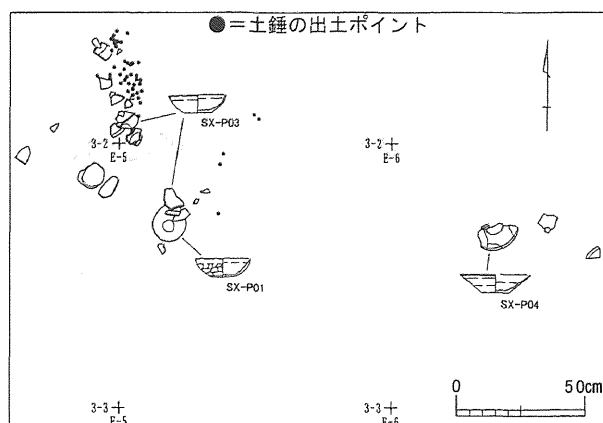
今後の、古代網漁技術および漁網鍾に関連する文化的行為の検討に備えるため、当地域で僅少な須恵質の例であり、かつ儀礼行為に関わった可能性が高い本資料を紹介したい。

II. 中桁遺跡出土の須恵質土鍾について

土鍾は、第13号住居の埋土上層における遺物集中地点から、破碎した4点の土師器坏とともにまとまった状態で56点が出土した(第2, 3図)。遺物の集中は1㎡ほどの範囲にみられ、報告書の記述によれば、この集中地点の南東約1mの位置にも同時期の土師器坏破片の集中が認められたとされる。13号住居の時期は、出土土器から7世紀中葉と判断された。一方、遺物集中地



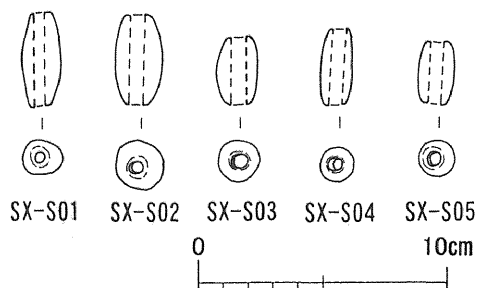
第1図 中桁遺跡の位置(志村2004を改変)



第2図 遺物集中地点（志村 2004 を改変）



第3図 出土した須恵質土錘（筆者撮影）



第4図 中桁遺跡出土土錘（志村 2004 を改変）

点の時期は出土坯の型式から 10 世紀前半と推測され、住居と集中地点は同時期に属さない。報告書では、詳細は不明であるが、遺物集中地点は「本来は土坑状の遺構になるものと思われる」（志村 2004：29 頁）との見解が示されている。

集中地点における出土状況は、13 号住居の埋没過程で、土坑の可能性のある遺構内において、土師器坏 4 点と土錘を用いた何らかの行為が行なわれたことを示している。土錘とともに出土した土師器坏は割れた状態であった。これらが人為的に破碎された後に埋没したのかどうか明らかではないが、土師器片を接合すると 4 点の完形となることから、自然の堆積中での破損とは考えにくい。遺構内において坏のみ 4 点が意図的に破碎された可能性があり、また漁網の保管場所とは考えにくい遺構から土錘が出土している。そのため、この行為を日常的な行為とみるよりは、非日常的な行為すなわち儀礼行為であった可能性が示唆される。周辺の各遺構の時期からみて、中桁遺跡では住居廃絶後 300 年ほど経った後、住居の埋没過程の中で土坑状の施設が設けられ、数点の坏の破碎と土錘あるいは漁網を伴う儀礼行為が行なわれたことが推測されるのである。坏の集中がもう 1 ヶ所見つかっていることから、この行為は 13 号住居の埋没中、複数回行なわれた可

能性がある。

遺物集中地点から出土した土錘は、すべて完形の須恵質土錘である（第 4 図）。いずれも中央

部が若干肥厚する、いわゆる紡錘形を呈する管状土鍾である。両端は丸みを帯びているが、中には端部に狭いながら面取りを施す例も認められた。その例であっても、端部と側面との境は磨滅し稜線は明瞭ではない。製作時における調整の痕跡は、使用による磨滅のため確認できない。このため当初は石鍾と見なされたのであろう。胎土は、砂粒などが含まれず精製される。灰白色に発色する例がほとんどである。全点完形ながら、No. 19 および No. 52 の端部には使用のためと思われる欠損が認められた(第5図)。



第5図 使用による端部の欠損(筆者撮影)

形態の検討に移りたい。属性表を第1表、長幅散布図を第6図として示した。ここに使用した数値データは、改めて分析を行なうため筆者が計測し直したものである。

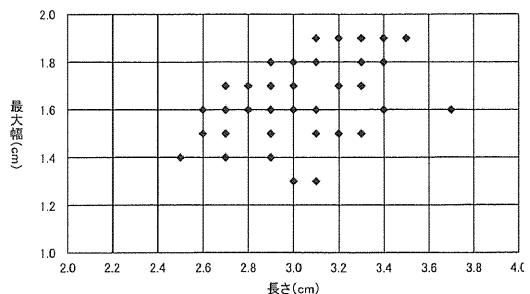
散布図から本土鍾は、長さ2.5～3.5cm、最大幅1.3～1.9cmの範囲で形態がまとまることがわかる。すなわち長さ3cm前後、最大幅1.6cm前後に形態が揃えられる。次に、1gごとに重量ヒストグラムを作成し第7図として示した。重量は7～9gを中心としており、5g以上の差をもつ土鍾は認められない。また孔径(最大)は、0.4cmの例が1点、0.5cmの例が27点、0.6cmの例が26点、0.7cmの例が2点である。孔径は0.5～0.6cmに整えられていたと考えられる。

形態の分析から、定められた規格に沿うように土鍾が製作されたことが推測される。もし漁網に着装する土鍾の形態が不統一であったとすれば、着装時あるいは網漁操業時に不都合が生じるはずである。使用時の利便を考慮し、統一的な規格のもとで土鍾は製作されていたのであろう。

須恵質土鍾が本遺跡から出土したことは、当時この集落において、土師質よりも強度の高い漁網鍾が必要とされたことを示している。本土鍾は、製作時の調整痕が磨滅するほど使用されていたにもかかわらず、使用による端部の欠損は2点のみにしか確認できない。これは須恵質土鍾の強度の高さを示している可能性がある。中桁遺跡が潤井川の東岸に位置すること、また本例が同時代に認められる管状土鍾の中では比較的小型の部類に属することから、本土鍾は引網などの大型の漁網ではなく、遺跡近くの河川下流域において、投網あるいは刺網など小型の漁網に着装されていたものと推測する。

本土鍾製作地の特定は今後の課題となる。ただし、駿河湾沿岸地域では古代に属する須恵質土鍾は出土していないので、搬入品である可能性が高い。

ところで、本土鍾の帰属時期である10世



第6図 中桁遺跡土鍾長幅散布図

第1表 中桁遺跡出土土錘観察表

No.	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	No.	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)
1	3.7	1.6	0.5	8.8	29	2.8	1.7	0.6	8.0
2	3.5	2.0	0.6	12.6	30	3.1	1.6	0.6	6.3
3	2.7	1.6	0.6	6.4	31	3.1	1.8	0.5	9.3
4	3.1	1.4	0.6	5.2	32	3.3	1.8	0.6	9.9
5	2.5	1.4	0.6	3.9	33	3.5	1.9	0.6	10.5
6	3.0	1.8	0.6	8.9	34	3.0	1.8	0.5	10.7
7	3.0	1.7	0.6	7.2	35	3.2	1.9	0.6	9.5
8	2.9	1.6	0.5	5.8	36	2.9	1.8	0.6	8.4
9	3.3	1.5	0.5	7.8	37	3.0	1.7	0.5	8.2
10	3.2	1.5	0.5	7.2	38	3.3	1.9	0.5	10.5
11	3.2	1.5	0.5	7.7	39	3.1	1.5	0.5	7.3
12	2.9	1.8	0.6	9.0	40	2.8	1.8	0.5	8.6
13	2.9	1.6	0.6	7.0	41	2.9	1.6	0.5	5.7
14	3.1	1.4	0.6	5.8	42	2.7	1.6	0.4	6.1
15	2.8	1.6	0.5	6.9	43	3.1	1.8	0.5	8.3
16	3.0	1.5	0.6	6.0	44	3.4	1.6	0.5	6.3
17	3.0	1.6	0.5	6.8	45	3.1	1.8	0.5	8.2
18	2.9	1.7	0.5	6.5	46	3.3	1.9	0.6	10.1
19	2.9	1.6	0.5	7.8	47	2.7	1.4	0.6	5.5
20	2.7	1.7	0.5	7.7	48	3.0	1.8	0.6	8.3
21	2.9	1.8	0.5	8.4	49	3.0	1.6	0.6	8.1
22	3.3	1.8	0.6	10.1	50	2.9	1.7	0.6	7.4
23	2.9	1.5	0.6	5.5	51	2.6	1.6	0.6	6.7
24	3.0	1.8	0.5	9.4	52	3.2	1.7	0.6	7.1
25	3.4	1.9	0.7	10.7	53	2.9	1.5	0.5	5.4
26	2.7	1.5	0.5	5.7	54	3.3	1.8	0.5	9.1
27	2.8	1.7	0.6	7.2	55	2.9	1.7	0.7	6.0
28	2.8	1.7	0.5	7.6	56	3.3	1.5	0.5	8.0

紀は律令制の転換期と考えられ、さまざまな文化変化が生じる時期である。例えば10世紀後半には、東濃窯と遠江・駿河の窯業地において、瓷器生産窯が新たに出現するとともに従来の窯が急激に生産を高め、また従来の律令制下における瓷器製品の流通圏にも変化が生じる(柴垣1993)。10世紀の窯業をめぐる生産・流通の変化の中で、窯業製品である本土錘もそれまで流通していなかった駿河湾沿岸地域へもたらされたものと推測される。

Ⅲ. 古代の漁網錘と儀礼行為との関連

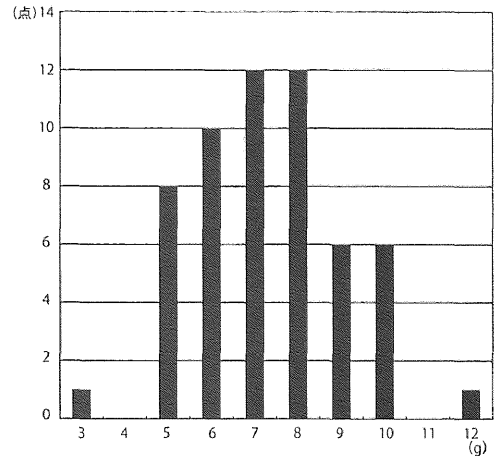
中桁遺跡出土の土錘は、上述した出土状況からみて儀礼に関連する遺構から出土した可能性が高い。一般的に古代の土錘は、住居跡からの出土例が大部分を占める(種石2006・2007a・2007b)。これらの例については、漁に備え住居内に漁網を保管した痕跡と解釈されてよい。しかしまれに、本資料の出土状況と同様に、漁網の保管場所とは考えられない、土坑や古墳石室などの遺構からの出土事例も存在する。以下に管見に触れた事例を示したい。

奈良県五条市塚山古墳は古墳時代中期の方墳で、箱式石棺の外側から棒状土錘が複数個まとまって出土した(奈良県教育委員会1957)。この出土事例について大野左千夫は、土錘を着装した漁網が置かれていたと推測する(大野1980)。

神奈川県茅ヶ崎市上ノ町遺跡I区10号土坑からは、平面が径1.5～2mの不整円形を呈する

土坑から、土師器片とともに長さ3～4cm、最大幅0.8cm前後の管状土鍾101点が出土した(浅場 1990)。本土坑は、古墳時代終末期から平安時代初頭までの時期に属する可能性がある。

島根県浜田市小才1号墳では、石室床面から浮いた状態で管状土鍾184点が出土した(内田 2006)。分布には粗密があったという。時期は7世紀代に属する。土鍾の形態は、平均で長さ5.2cm、最大幅1.9cm、孔径0.57cm、重量15.9gを測る。うち9点が須恵質であった。報告書では、漁網が閉塞部分に配置あるいは吊り下げられていた可能性が示されている。内田律雄によれば、朝鮮半島南東部における4～6世紀の土坑墓・石槨墓・古墳の主体部からも管状土鍾の出土が確認できるようなのである(内田 前掲)。



第7図 重量ヒストグラム

以上の個別事例のほか、弥生時代から平安時代までに属する、海に関連する生産用具の1985年以前出土例の集成(埋蔵文化財研究会 1986)と、3～7世紀に属する、1986年以降出土の海の生産用具の集成(埋蔵文化財研究会 2007)がある。これらを参考に、類例を挙げてみたい。

まず前者の集成から示す。7世紀初頭の円墳である京都府竹野郡網野町字磯相谷1号墳の横穴式石室内部からは安山岩製有溝石鍾が出土した。7・8世紀の祭祀遺跡である静岡県浜松市半田町下滝遺跡では、管状土鍾が祭祀遺物と共伴して出土した。そして同県静岡市清水区山の鼻遺跡では、古墳時代に属する0.9×0.6m、深さ0.25mの平面が不整楕円形のピットから、土師器・須恵器とともに管状土鍾41点が出土した。うち13点は須恵質であった。

次に後者の集成を示す。宮城県石巻市梨木畑貝塚では、2体の伸展葬人骨の頭部周辺から古墳時代前期土器と23点の球状土鍾の集中が認められた。静岡県浜松市北区細江町広岡井通遺跡では、平面が長円形を呈する3208号土坑から6世紀後半代の土器とともに管状土鍾19点が出土した。同区都田町の径約12mの円墳である見徳3号墳の横穴式石室内からは、須恵器や鉄鏃とともに管状土鍾88点が出土した。古墳時代後期の円墳である京都府綾部市多田町丸山キツネ塚古墳では、横穴式石室内外から管状土鍾138点が出土した。特に玄門部右側では119点のまとまった出土状況が確認された。そして岡山県岡山市加茂矢部南向遺跡では、平面が径60cmの円形の土坑から管状土鍾30点が出土した。この土鍾の属する時期は不明だが、古墳時代前期住居に伴う土鍾に形態が類似する。

以上の出土例は、古代において、土鍾あるいは土鍾を装着した漁網が、土師器・須恵器また祭祀遺物とともに土坑、そして埋葬場所や横穴式石室内において何らかの行為に用いられていたことを示している。いずれの遺構も一般的な漁網の保管場所とは考えにくく、これらの事例に用いられた土鍾は、中桁遺跡の土鍾同様、儀礼など非日常的な行為に使用された可能性が高

いと推測する。

漁撈具と儀礼行為との関連を示唆する出土事例では、古墳時代前・中期におけるヤス・銚・釣針の漁具の古墳への副葬が挙げられる。清野孝之は古墳時代前・中期古墳における漁撈具副葬について検討し、これらの漁具が海洋・河川と何らかの関連をもつ儀礼行為に使用されていたと解釈した(清野 1999)。

ここで示した諸事例と中桁遺跡資料は、土鍾を着装した漁網が、古代において何らかの儀礼の意味を有していたことを示唆するだろう。食料獲得行為である漁撈は、動物性蛋白源の獲得という重要な意義を認めるとしても、古代農耕社会における生業活動全体からみれば、副次的あるいはそれ以下の存在に過ぎなかったはずである。しかしそのような古代社会にあつて、土鍾をはじめとする漁撈具が、当時文化・社会的に大きな意義をもつ儀礼に関わっていたのである。このことは、古代において漁撈が、単なる食料獲得以外の文化的意味も有していたことを示唆する。

謝辞

資料実見にあたり、富士市立博物館職員の皆様に便宜を図っていただいた。また中村博子氏から執筆に際し有益な御教示を賜った。御礼申し上げる。

註

1) 富士市立博物館も、現在は須恵質であるとの見解を示している。

引用・参考文献

- 浅場好良 1990 「上ノ町遺跡1区10号土壙出土の土鍾について」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査10周年記念集』39～43頁。
- 内田律雄 2006 「魚網鍾を出土する古墳」『青山考古』第23号 青山考古学会 29-46頁。
- 大野左千夫 1980 「有孔土鍾について」『古代学研究』第93号 30-38頁。
- 清野孝之 1999 「古墳副葬漁撈具の性格」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室 307-321頁。
- 柴垣勇夫 1993 「須恵器・瓷器の生産と流通」『新版古代の日本7中部』角川書店 377-398頁。
- 志村 博 2004 『中桁遺跡』富士市埋蔵文化財発掘調査報告書。
- 種石 悠 2006 「関東地方における原史・古代の土鍾について」『物質文化』第80号 物質文化研究会 29-53頁。
- 種石 悠 2007a 「東北地方における原史・古代の土鍾について」『物質文化』第83号 物質文化研究会 21-44頁。
- 種石 悠 2007b 「原史・古代の内陸漁撈」『考古学談叢』六一書房 715-735頁。
- 奈良県教育委員会 1957 『奈良県埋蔵文化財調査報告書1』。
- 埋蔵文化財研究会 1986 『第19回埋蔵文化財研究集会 海の生産用具ー弥生時代から平安時代までー資料集』。
- 埋蔵文化財研究会 2007 『第56回埋蔵文化財研究集会 古墳時代海人集団を再検討する 資料集』。